第 33 回日本受精着床学会
東京都、2015.11.26-27

高齢不妊患者における採卵数別の着床率・生産率からみた胚質の検討

山内博子　中岡義晴　北山静香　高橋由妃　高橋佳世
勝佳奈子　高矢千夏　姫野隆雄　伊藤啓二郎　森本義晴
IVFなんばクリニック

（目的）生殖補助医療における最も重要な問題である多胎妊娠を可能な限り回避するために、単一胚移植が勧められている。一方、良好胚の選別は胚形態のみでは診断できない事が知られており、染色体異常の増加する高齢女性では時間と費用の関係から複数胚移植がしばしば選択される。そこで、41 歳以上の高齢女性の新鮮胚移植を対象として、移植胚の質に採卵個数で差があるかどうかを検討した。
（方法）2011 年から 2013 年に体外受精を行った 41 歳以上の女性(41－50 歳）のうち、分割期胚の新鮮胚移植を実施した 386 周期を対象とした。採卵個数と移植胚 1 個あたりの胎嚢確認率(着床率)及び生産率との関連性を検討した。
（結果）着床率は、採卵数 1 個、2～5 個、6～10 個、11～15 個、16 個以上でそれぞれ、2.6%(1/39)、10.4% (14/134)、9.9%(13/131)、11.8%(8/68)、7.14%(1/14)で有意差は認めなかった。また生産率も採卵数 1 個、2～5 個、6～10 個、11～15 個、16 個以上でそれぞれ、2.6%(1/39)、5.2%(7/134)、6.1%(8/131)、2.9% (2/68)、7.1% (1/14) で有意差はなかった。
（結論）採卵数による着床率の差は、採卵数が 1 個と 16 個以上の場合は低い傾向にあったが、いずれも有意差はなく、また採卵個数に関わらず生産率は非常に低値であった。採卵個数により移植胚の良・不良を決める事は出来ず、41 歳以上の患者の場合、一律での 2 個移植も妥当な選択肢ではないかと考えられた。